

美人社長

里帆二十六歳

第四卷 女社長の恥辱の裸踊り

海老沢 薫

## 内 容

- 著作権について
- ま え が き
- 第一章 セクシーポーズを見せる女社長
- 第二章 女社長の恥ずかし過ぎる行為
- 海老沢薫 B L O G
- 海老沢薫 Web連載小説

■ 著作権について

「美人社長 里帆二十六歳 第四巻 女社長

の恥辱の裸踊り」(以下本書と表記する)の

著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、  
及び国際条約によつて保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもつて許可し

た場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子フア

イル、ビデオ、テープレコーダー)により複

製、流用、転載、転売することを固く禁じま

す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第

619条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

大型スーパーの店の外で極小ビキニ姿で過  
激なポーズを披露する羽目になった新進気鋭  
の美人社長、神山里帆。買い物客の主婦達が  
好奇と軽蔑の眼差しを向ける中、卑猥なガニ  
股ポーズで腰を厭らしく振り乱す様は、もは  
やただの発情したメス犬同然で、社長として  
の貫禄はどこにも感じられなかった。

そして、極限の羞恥状況にトランス状態に  
陥りかけた里帆に思いがけないハプニングが  
起きてしまう。踊っている最中にビキニトッ  
プの紐が解け落ち、豊かなバストが観衆の前  
に露わになってしまったのだ。

お願い、もう許して・・・。そんな美人社  
長の願いも虚しく、ギャラリィからそのまま  
踊り続けるような命じられた里帆は、バストを  
上下左右に揺らしながら卑猥な踊りを演じる  
しかなかった。

すると、死ぬほど恥ずかしい踊りを披露し  
続ける里帆の前に、なんと学生時代の後輩で

創業メンバーでもある二人の社員が現れたのだった。  
いつも可愛がっている彼女達にどうしようもない痴態を目撃されてしまった里帆は精神が崩壊しそうになりながらも、二人の前で卑猥な踊りを続けた。しかし、そんな里帆に追いかけるようなハプニングが起き・・  
やがて、公衆の面前で一糸纏わぬ姿になり卑猥な踊りを披露する美人社長を、二人の女性社員達は冷たい眼差しで鑑賞していた。

■ 第一章 セクシーポーズを見せる女社長

大型スーパーの外には百人近い人だかりが  
でき、その中心には黄色い蛍光色の極小ビキ  
ニを纏った里帆が四つん這いになっていた。  
ついさっきまでお尻を激しく左右に振ってい  
たせいにか、その体には汗がうつすらと滲み出  
て何とも言えない色気を醸し出していた。そ  
して、空に向かって高々と掲げたお尻は、水  
着が割れ目に鋭く食い込み丸出しとなり、買  
い物客達に何発も平手打ちされたせいであ  
紅く染まっていた。  
若き美人社長は、もはやただのメス犬にま  
で成り下がりに、クライアントの男に自らの弱  
みを握られてしまったせいであ、今、周りを取  
り囲む大勢の買い物客達の言いなりになるし  
かなかったのだ。  
「アナタ、もう四つん這いは良いから立ち上  
がりなさい！」

さっき四つん這いを強要した主婦がそう言う  
と、里帆は少しホツとした様子でゆっくりと  
地面から手を離して立ち上がった。しかし、  
お尻に食い込んだ水着を元に戻すことは許さ  
れず、水着はTバック状態のまま、里帆のお  
尻は丸出しとなっていた。  
「それじゃあ今度はガニ股になつて、両手を  
頭の後ろで組んでちょうだい！」  
さっき四つん這いを命じた主婦は、極小ビキ  
ニを纏った里帆に新たなポーズを要求した。  
「わ、分かりました」  
もう逆らうことのできない里帆は素直に言わ  
れた通りのポーズを作つて見せると、それは  
想像以上に屈辱的なポーズであることが分か  
り、里帆は恥ずかしさに唇を噛みしめた。  
「また随分と厭らしい恰好ねえ。でもスケベ  
なアナタにはとっても良くお似合いだわ」  
「アハハっ、なんか面白〜い。これってただ  
の変態ポーズじゃない」

「良くもまあ、こんな場所で股を大きく開けるわねえ。まったく羞恥心もないのかしら」

「この人、露出狂だから恥ずかしいポーズをしてきつと喜んでいるのよ」

「あらやだ、それならアナタ、そんな暗い顔していいないで、もっと明るく微笑んでみなさいよ」

極小ビキニを纏った美女の破廉恥なポーズを目の当たりにした買い物客達は里帆を罵りながら、さらにその羞恥心を煽るように笑顔を要求したのだった。

「そんなこと・・・」

里帆はあまりに酷い命令に唇をさらに強く噛みしめた。

「何よ、また私達に反抗するつもりなのかしら？」

買い物客達はそう言うのと、ガニ股ポーズを決める里帆に詰め寄った。

「す、すいません」

里帆は、買い物客達の気持ちを逆撫でするわけにはいかなかった。すぐ近くにはクライアントの男が立っていて、もしも買い物客達の逆鱗に触れ、クライアントの新商品が自分のせいでもなければ、さっき店内で演じた自らの痴態動もなれば、さっき店内で演じた自らの痴態動画が世界中に拡散されてしまうのだ。だから、今日の前にいる買い物客達のどんな屈辱的な命令にでも従うしかなかった。

里帆は極小ビキニからはみ出た乳房を正面に、いるギャラリーに見せつけるように胸を前に張り出し、形良いお尻は背後にいるギャラリーに突き出すような破廉恥なポーズを作ったまま、ゆつくりと口角を上げ、僅かに開いた唇からは白い歯を覗かせて笑顔を浮かべていった。その顔はいかにも作り笑いだと分か

る引きつったものであったが、それが返って見る者の加虐心を煽るのだった。

「やだあ、ホントに笑ってるう！」

「信じられないわ、こんな恰好して恥ずかし  
くないのかしら？」  
「これじゃあ本物の変態じゃない！」  
破廉恥なポーズを作りながら、引きつった笑  
顔を浮かべた美女を、買い物客達は面白可笑  
しく罵り、里帆が恥ずかしさに体を震わせる  
様子を楽しんだ。  
ああん、もうこんなイヤ・・・。里帆は  
大勢の同性のしている前で破廉恥な姿を演じ  
続ける事に言葉にならない屈辱を味わってい  
た。  
「それじゃあ、その恰好のまま腰を左右に振  
りなさい！」  
買い物客の一人が強い口調で里帆にそう命じ  
たのだった。

■ 第二章 女社長の恥ずかし過ぎる行為

さらなる屈辱の踊りを命じられた里帆は、引きつった笑顔を浮かべたまま、ゆつくりと腰を左右に振り始めた。両脚をおもいきり開いたガニ股の体勢のため、その踊る様は普通に腰を振る以上に卑猥なものとなり、周りを取り囲む大勢のギャラリ―を湧かせた。

「キャッー、厭らしい！」

「なんてスケベな女なの！ 見ているこっちが恥ずかしくなるわ」

「こんな厭らしい踊りをしながら、まだ笑っているわよ。一体どういう神経をしているのかしら？」

買い物客達は、目の前で卑猥な踊りを披露する主婦は口に手を当てて驚き呆れた表情を浮かべ、またある主婦はスマホで里帆の卑猥な踊りをじつくりと撮影し、小さい子供を連れ

て いる主婦は、子供には絶対見せたらいけない  
いとばかりに、慌ててその場から立ち去るの  
だった。  
あああん、恥ずかしい・・お願い、もう  
許してえ。卑猥な腰振りダンスを続ける里帆  
は、必死に作り笑顔を浮かべながらも、心の  
中ではあまりの羞恥に泣き叫んでいた。しか  
し、里帆の心の中で泣き叫ぶ声など大勢のギ  
ャラリ―には聞こえないのか、いつしか誰か  
らともなく手拍子が起こり始め、里帆はその  
手拍子に合わせて腰を左右に振るようになって  
ていた。  
「腰の動きが弱くなって来たわよ！もつと激  
しく振り乱しなさい！」  
「それから顔が恐いわよ！ほら笑顔でしよ！」  
里帆の腰の動きや顔の表情が少しでも崩れて  
くると、すぐにギャラリ―から容赦ない罵声  
が浴びせ掛けられ、里帆は全力で作り笑顔を  
浮かべながら腰を激しく振り続けるしかなか  
った。

大型スーパーの外にできた百人近い人だから、手拍子を叩き続ける様子に、面白い物を終えて店の中から出てきた客や、外の通りを歩いている通行人達も思わず立ち止り、人だかりの中心で破廉恥なダンスをしている水着美女に気付くと、皆一様に驚きの表情を浮かべた。そしてある者はそのままギリギリした視線を向けながら里帆の踊りを鑑賞し、またある者はアホらしいといった様子で足早に立ち去って行った。

そうして、里帆の過激なダンスパフォーマンスが数分間続くと、里帆の近くにいた主婦の一人が、今度は腰を前後に振るようにと命じ、里帆は言われるまま腰の動きを変えていった。すると、新たな里帆の腰振りはいかに多くのギャラリィを興奮させた。

「キャットー」

買い物客の女性達は、水着美女のあまりに過  
激な姿に悲鳴を上げ、もはや罵る事さえ忘れ  
て食い入るようにその様を鑑賞した。  
あああん、みんなそんな目で見ないで。里  
帆は、周りを取り囲む大勢のギャラリーのギ  
ラギラした視線を全身に浴び、思わず軽い目  
眩を覚えた。水着からはみ出た乳房や、前後  
に揺れる股間、そして必死に浮かべている引  
きつった笑顔にほとんどの視線が集中し、里  
帆は群衆に視姦されているような錯覚に陥り  
かけていた。  
するとその時だった。里帆のすぐ目の前に  
いた主婦の一人が、里帆の股間の辺りを指差  
し悲鳴を上げた。そのシチュエーションは、  
さっきの店内の時とまったく同じもので、主  
婦が指差す先には、里帆の秘部から溢れ出た  
厭らしい汁が太股を伝って地面へと滴り落ち  
ていたのだ。  
「ちよっと何なのよこれえ！」

「アナタ、私達に見られているだけで感じち  
やったの？」  
「やだあ、ウソでしょ。信じられなくいい」  
里帆が激しく腰を前後に振るたびに、水着の  
股間から溢れ出した汁が飛び散り、地面を濡ら  
していく様子を多くのギャラリーが目撃した  
「あああん、見ないで下さい！」  
里帆はあまりの恥ずかしさに、もう引きつつ  
た笑顔さえ浮かべていらなかった。

■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不幸事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>